

北京騷擾 その四

中島八十一

天安門より逃げ歸りたる明くる朝、心地よき目覺めに満ち足りて床を離る。試みにテレビ點くれば中國語による三行餘りの短文のみ変はることなく映じたり。漢字にこそあらめ正確には理解しがたきも、北京市内は平穩にていかなる問題を見ることなしとの大意ならん。窗外に目をやれば天安門方面に黒き煙の高きに立ち上れる怪しからん風景なるも、ホテルの眞下を何事も無きやう來りて去る自轉車いくらかあれば、禁足といふこともなからん。初めての北京の朝、いづれの風景のいづくまで日常なりや知る由もなし。

まづは朝食と食堂に向ひたるに、學會仲間の四人ばかり卓を圍みて食事摂りたり。しきりに話すも低き聲にていかにも憚りあらん。無論日本人客は學會參加者のみならず、小姐シヤオチエの持ち來るメニューに従ひ注文すれば、やがて食事の届くはその日限りのこととなれり。話は昨夜の出來事に尽きたるも天安門近きに在りたるは余の一行のみならん。他の者様々なるルートより入手したる異常事態につき、その噂の整理こそ低き聲の談話の主體ならめ。後日談なれど、前夜上海經由にて北京入りしをる夫婦ありて、この朝ホテルにて呼びたるタクシ―驅り、いささかの不安だに持たずに萬里の長城訪ひ、また夕方歸り着き、皆の顔つきに何事かあらんと驚きたり。

午前遲きに宿泊せるホテルにて學會の開會式あればそれまで自室で過ごさんと席を離れたり。一人ロビーに出たれば長さ20メートル前後、幅一メートルに足らざる幟の一本ばかり長々と並べられをり。赤地に金文字にて毛澤東思想萬歳、中國共產黨萬歳などと書かれたり。居合わす中年のホテルスタッフにこれ常に用意しをる物やと尋ねるに、普通のことなりと短く英語にて答へり。

開會式は件の會長を務むる老婦人の歡迎スピーチに始まり幾人かの中國國外からの役員の挨拶に續きやがて懇親會に移行せり。豪華なる料理の大廣間に多數並びたるに、大層なる盛會となるはずの參加者百名をやうやく超ゆる人數なれば豫想よりかなり少なきに、うそ寒き空氣に包まれたるは如何ともし難し。今にして思へば、中國國內各地よりの參加者は訪ふことなく、中華系外國人はすでに北京を離れたるらん。

會長の老婦人、各テーブルを訪ね歩き、爾なんぢいづれの研究なしたる、論文の掲載ありやと尋ねたり。その風貌、想像通りに服装は地味にて髪型もまたしかり。アクセサリーを見ることなし。片やその身のこなし、話す風情、すべてにおきて北京協和醫學院の教育俵たぐひばれたり。否、米國生活長かりしや。世が世ならば、或いはそのまま米國社會に移動したならば、貴婦人として遇せらるるに疑ひ無し。

學會役員たる中國人に知人持つ者それぞれに情報を持ち寄れり。ある病院にて40人亡くなれり、別の病院は30人とも。かかる施設は他にもあるらし。銃にて撃たれし者ありて、街中は物騒なる状態になりたりと伝へり。にはかに余に緊張感走り、我等ホテルに孤立せることをやうやう理解したり。ことは肅々と進行を見たり。しかるに開會式と懇親會のみの開催にて、以後の學會プログラムいづれも始まりを見ず。人氣無き發表會場より學會事務局に赴いたる者はno problemばかりを聞きたるにno wayとつぶやき戻りたり。余もまた已むを得ずして自室に戻りたるもテレビ畫面は今朝が見たと変はらぬテロップ流すばかりにて、そはいずれのチャンネルも同様なり。いくらかの苛立ち覚え、ややあつて再びロビーに降り立ち、許しを請ふことなしに恐る恐る扉を開け外に立ち、顧みれば朝方見たる赤き幟すべてホテル屋上より垂れ、風にたなびきたり。不可解と言へば余のボスたるベルギー人夫妻の姿を開會式に見ざるごと、筆頭役員の不在は今日まで理由を知らず。

テレビはすでに述べたる如くにて、次いで電話の遮断起きたり。次第に異常事態の關心は銃の恐怖より隔絶の恐怖へ移れること実感したり。夕食は何事も無きかのやうに摂りたるに、日本への電話は無論、テレックスの送信を試みるも、これまた如何ともするなしと話す者あり。銃聲こそ聞かざれ、落ち着かざる一日を終へ、眠りに就く折にはバスにて眠らんかと思慮しつつ、ツインの窓より離るる方のベッドを選びたり。

(令和四年十一月十九日)

受附)